大修館の一冊

日本語文法事典

仁田義雄／尾上圭介ほか　編
A5判／762pp.／本体8,000円

本事典は日本語文法学会設立当初から企画され，10年以上かけて完成された。編集主幹の仁田義雄氏はじめ関係各位のご尽力に心より感謝申し上げたい。

本事典の特徴を一言で言えば，「読める事典」ということになるだろう。各項目が，単なる事項解説に留まらず，１つの読み物として成立している。その中でも最大の特徴は，同一項目を複数の執筆者が執筆している項目がある（全項目の約12％）ということで，これはこれまでの類書にはない画期的なことである。

同一項目（特に，学説が分かれるもの）を複数の執筆者が執筆することによって，その項目に関する学説史を通観することができる。一例を挙げると，「モダリティ」は尾上圭介，仁田義雄，工藤浩の三氏が執筆している。尾上氏の執筆部分では，日本語学における「モダリティ」の用語法が，「非現実事態にある事態を語るための専用の文法形式」に関するものであるA説と，「発話時の話者の主観や言表態度によって表されたもの」に関するものであるB説に分かれることが述べられ，両説の立場の違いやA説の内実が詳述されている。A説は尾上学派の，B説（仁田氏の執筆部分に相当）は仁田・益岡学派の立場に相当すると考えられるが，これまで両者の違いとその違いの起源について，このように明示的かつ両学説の内容についてもわかる形で述べられたことはない。

山田文法，松下文法についても，包括的でわかりやすく記述されている。これからの日本語学を考える上で，山田と松下の学説を顧みることは非常に重要であるが，こうした点からも本事典の価値は高いと言える。一方，「語（単語）」の鈴木重幸氏の執筆部分では，言語学研究会の単語の認定基準が松下大三郎の流れをくむものであることや，それ故に「文節」は不要であることなど，興味深い記述が行われている。

本事典は日本語学の研究者にとっても有益であるが，何より，これから日本語学の研究を志す大学（院）生にとって研究上の羅針盤となるものであると言える。

（一橋大学国際教育センター教授 **庵　功雄**）